

年を経し糸の乱れの苦しさに衣のたてはほころびにけり

源義家／安倍貞任

『古今著聞集』巻第九、武勇第十二「源義家衣川にて安倍貞任と連歌の事」の一首。さきに義家が下句を、それを受けて貞任が上句を付けた連歌形式の歌。

前九年の役(一〇五一〜六三)のさなか、貞任敗走の場面でこの歌は詠まれた。原文では「伊予守源頼義の朝臣、貞任・宗任らを攻めむる間、陸奥に十二年の春秋を送りけり」とあるので、実際は十二年にも渡る長い戦いだったことがわかる。

季節は冬。頼義軍が軍政の役所である鎮守府を発ち秋田の城に移ったところ、雪がまばらに降ってきて、戦の男どもの鎧をすっかり白くしてしまった。貞任・宗任の拠点である衣川の城は、岸が高く川の近くに建っていたので、頼義軍はみな盾を頭上にかかげて兜に重ね、筏を組んで敵へ攻め込んだ。そのあまりの軍勢に耐えられず、城の後ろか

ら逃げようとした貞任を、頼義の長男・義家が追ってゆき、敵に背を向けて逃げるとは卑怯だ引き返せ、言いたいことがある、と大きな声で呼び止める。

振りかえった貞任に義家は続ける。

「衣のたてはほころびにけり(衣の縦糸がほころびるよ
うに、衣川の館も崩れてしまった)」

この下句を聞いた貞任は、馬のくつわを緩め、兜のしころを振り向けてすかさず返す。

「年を経し糸の乱れの苦しさに(年月を経て糸の乱れが
ひどくなるように、長い年月に渡る作戦の乱れがひどい
で)」

今にも矢を放たんとしていた義家は、弦から矢を外し引き返していったという。

「さばかりの戦ひの中に、やさしかりけることかな」と原文は締めくくられる。年月の長さに加えて、季節や立地の厳しい状況での二人の敵味方を超えた優雅な振る舞い。歌を連ねることは、心を連ねることであることを信じさせ
てくれる歌説話である。

(小島なお)

